アジア・太平洋地域におけるトランスナショナリズムの展開―社会科学からの展望―の開催について

平成23年6月18日(土)、日本学術会議講堂においてアジア・太平洋地域におけるトランスナショナリズムの展開―社会科学からの展望―が開催され、一般、研究者の方々が集まった。

会議では、アジア・太平洋地域における国境を越えた人・モノ・情報などの動きや、それを支える新しい考え方、生き方を多面的から考えた。特に、現在、日本における若者の「内向き志向」ということがよく言われるが、経済活動、留学、看護・介護の国際化などの場における実態を踏まえたうえで、社会科学の立場から問題を展望した。

具体的には、最近よく言われている「日本のガラパゴス化」や先の大震災で帰国が相次いだと報道された「海外留学生の受け入れ」の問題、インドネシアやフィリピン政府から批判された「外国人看護師受け入れ」問題、激しい論争が起きているTPPの問題などが取り上げられ、報告・討論等が行われた。

（出演者）

開会のあいさつ　広渡清吾（専修大学教授・日本学術会議副会長）

趣旨説明：「日本のガラパゴス化をどう捉えるか」
末廣昭（東京大学教授・日本学術会議連携会員）
園田茂人（東京大学教授）

報告　１：「途上国化する日本を国際化が救う」
戸堂康之(東京大学教授)

報告　２：「日本の30万人留学生計画の現状」
横田雅弘（明治大学教授）

報告　３：「EPAインドネシア人看護師の日本体験：マイクロ・マクロ連携モデルの視角から」
浅井亜紀子(桜美林大学准教授)
箕浦康子（お茶の水女子大学名誉教授）
宮本節子（兵庫県立大学教授）

報告　４：「アジアの学術交流の現状：事例報告」
西原和久(名古屋大学教授・日本学術会議連携会員)

全体討論

討論のまとめ：山本眞鳥（法政大学教授・日本学術会議会員）

閉会のあいさつ　小谷汪之（東京都立大学名誉教授・日本学術会議会員）